

緊急提言および質問

2011, 5/29 玄侑宗久

現代文明の病弊の一つは、間違いなく行き過ぎた人間中心主義にある。主義というより、ほとんど無意識であることがその病の深さを物語っている。

今回、凶らずも警戒区域等の家畜の扱いにそのことが露呈した。

「まるでアウシュヴィッツですよ」

長年畜産を営んでいる知人が目を赤らめて言うのである。

4月までは概ね家畜を移動する方向で検討し、県の畜産課でも移動先が充分にあるという状況を確認している。沼尻や西郷村など、広大な牧場は県内だけでも間に合うだけある。

ところが5月12日に殺処分指示書が政府によって出され、一転して家畜は殺されることになった。(すでに4月25日から県は独自の判断で殺処分を決めていた) しかも筋弛緩剤を注射し、消石灰を撒いてブルーシートを被せるだけだというのである。その処分法が、まるでナチによる虐殺のようだと、畜産家の目には映ったのである。

宮崎の口蹄疫の際も、牛たちは埋設処分された。お線香をあげてほしいとまでは申し上げないが、埋設さえしないというのはあんまりなやり方ではあるまいか。少なくとも、また戻ってくるはずの場所でそんな殺生や非道い扱いはしたくない、というのが人間としてごく普通の心情だと思う。

警戒区域に当たる川内村の畜産農家を対象に開かれた説明会には、13軒の農家が出席し、安楽死に同意したのは5軒だけ。無理強いして殺す権利は県にも国にもないはずである。

原発から20キロ圏内には、牛約3,500頭、豚約30,000頭、鶏約44万羽がいた。すでに餓死した家畜も多いが、生き残った動物だけでもせめてスクリーニングし、除染し、移動することはできないのだろうか。

これはひとり畜産農家だけの問題ではない。大袈裟に聞こえるかもしれないが、あくまでも換金価値しか価値とみなさない現代文明そのものが問われているのだと思う。

なるほど南相馬市小高町の前田ポークや飯舘村の飯舘牛など、ブランド価値のある家畜は東京大学ほかの施設で保護育成されることになった。しかし私がここで申し上げたいのは、そのような市場価値のこ

とではなく、いわば「悉皆成仏」するべき命そのものの問題である。

畜産農家にとって家畜は家族同様の存在であるだけでなく、我々人類にとって、いや、少なくとも日本人にとっては、家畜といえども対等な命ではないか。いつからキリスト教圏のように、「家畜は人間のために神が与えてくれたもの」と考えるようになったのだろう。

死んだ家畜の補償に平均で各70万円、合計では少なくとも25億円使うという。

同じお金で家畜たちを移動し、飼い主たちを安心させ、せめて放射線の影響を調べる研究素材としてでも生き延びさせてはもらえないだろうか。エサの干し草や穀物にそれほど費用がかかるわけでもないし、その世話は避難している高齢者にでも可能である。また放射線の影響を調査する研究所を本気で建てるつもりなら、貴重な研究素材としての彼らを今殺してしまうことは暴挙とも云えるのではないか。

安楽死させる獣医たちの心労も計り知れない。

なにより今回の殺処分が執行されれば、それは畜産農家の快復不能な心の傷になるだけでなく、日本人全体にとっての負の遺産になるだろう。

動物たちの命をやすやすと踏みにじり、我々日本人はいったいどこに進もうというのか。安楽死に同意しない8軒の農家のことと一緒に考えてほしいのである。

もしも決定を翻すことはどうしても無理だというなら、是非とも政府には次の質問に答えていただきたい。

- 1, 受け容れ先もあり、放射能の影響を調査する貴重な素材ともなりえる家畜を、なにゆえ殺処分にしなくてはならないのか。
- 2, 放射線や放射性物質について研究する施設を、福島県に造る考えはあるのかどうか。
- 3, たとえ殺処分にするのがやむをえないとしても、埋設できないという理由はなにか？
- 4, 家畜の遺骸を放置することから考えられる警戒区域の将来は、明るくは考えにくい。原発収束まえではあるが、いったい政府はどんなふうにお考えなのか？

以上。